剣を手に

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
剣を手に

【Ｎコード】
Ｎ０２８９Ｚ

【作者名】
坂田火魯志

【あらすじ】
夜な夜な王宮を襲い人を喰らう巨人グレンデル。ベイオウルフはそのおぞましい巨人に対して一人で立ち向かい。シグルドと並ぶ北欧神話の英雄を書かせてもらいました。

第一章

剣を手に

王宮で。厄介なことが起こっていた。
湖から出て来る不気味な巨人がだ。王宮の者達を襲い餌食にしているのだ。そのことは王宮だけでなく国全体で問題になっていた。
それでだ。王もだ。
家臣達にだ。こう話すのだった。
「このままではだ」
「はい、無駄に人が殺されていくだけです」
「こう夜な夜な出て来てです」
「それで殺されては」
「どうしようもありません」
こう話す周囲だった。そうしてだ。
彼等もだ。見ればだ。数が少なかった。
「我等も何人も喰らわれていますし」
「我等大臣達だけでなく騎士達や兵達もです」
「多くが喰らわれています」
「このままでは国自体がです」
「成り立たなくなる」
王もわかっていた。このことが。
それで今だ。少なくなった大臣達に話すのだった。
「だから何とかしたいが」
「しかしです。あの巨人はです」
「グレンデルと名乗っていますが」
巨人は人の言葉を喋れる。知能もあるのだ。
その知能と力でだ。王宮を襲っているのだ。
だからこそ厄介だった。そのグレンデルという巨人は。本来は豪奢で優美に包まれている王宮はその巨人の為に沈みきっている。

その中でだ。彼等は王に話していく。
「何とかせねばなりません」
「倒さなくては国が滅びます」
「そうなってしまいますが」
「それでも」
「どうすればよいのだ」
王の言葉は苦いものだった。
「あの巨人を倒せる者はいるのか」
「既に何人も餌食にされています」
「見事な騎士が」
戦うべき彼等ですらだ。餌になっているというのだ。
それではどうしようもない。そういう話になっていた。
だがここでだ。王の間にある男が入って来た。
見事な金髪を短く刈り青い目は強い光を放っている。逞しい長身に四角い厳しい、岩石の様な顔、その若者が来たのだ。
質素な青いズボンと上着、それにマントは戦う者に相応しい質素な服装だった。その彼が王の前に来て片膝を折りだ。こう言ってきたのだ。
「王よ、ここは」
「そなたが行くというのか」
「はい」
こうだ。その若者は外見に相応しい低く強い声で言うのだった。
「そうさせてもらいたいのですが」
「ベイオウルフ、そなたが行くのだな」
「その巨人、グレンデルですね」
「うむ、それがその巨人の名だ」
「旅先でも耳に入っていました」
実は彼、ベイオウルフはこれまで旅に出ていたのだ。国に戻ったのはついこの前だ。その彼がだ。王に対して言うのである。
「禍々しい相手ですな」

「そして強い」
「はい」
「どうにもならないが」
「いえ、私が倒します」
ベイオウルフは言い切った。
「必ずや」
「できるというのか」
「はい、できるからこそ今こうしてです」
言っているというのである。
「そうさせてもらいます」
「そうか。しかし相手は」
「今夜にもですね」
「この王宮にも来る」
「そうですね。ここにも」
「行く必要はないか」
巨人のいる湖にはというのだ。
「だが。しかしだ」
「手強いというのですね」
「それでもよいのか」
「それを承知でのことです」
そうだとだ。ベイオウルフは言うのである。
「ですから」
「安心せよというのだな」
「お任せ下さい」
また言う王だった。

第二章

「是非」
「そうか。それではだ」
「はい、では今夜に」
こうしてだった。話は決まった。
ベイオウルフはこの日王宮において相手を待った。その彼にだ。
兵達は怪訝な顔でだ。彼に声をかけるのだった。
「あの、本当にです」
「宜しいのですか？」
「相手は強いですよ」
「それもかなり」
「強いか」
ベイオウルフは冷静な声で応えたのだった。
「そうだな。巨人だからな」
「俺達の同僚もかなり食われてますし」
「騎士の方もです」
「多くの人間が食われてますけれど」
「それでもいいんですか？」
「その巨人を倒す為にだ」
その為にだとだ。ベイオウルフはまた言った。
「俺は今ここにいるんだ」
「じゃあいいんですか？」
「本気でその巨人を倒すんですか」
「グレンデルを」
「絶対にな。倒す」
こう言ってだ。それでだった。
彼は肉、干したそれを食いながら待っていた。そしてだ。
程なくだ。向こう側から叫び声が聞こえてきた。

「来たぞ！」
「あいつが出て来たぞ！」
「グレンデルだ！」
こうだ。兵達の声がしてきたのだ。
「あいつが来た！」
「こっちだ！」
「何とかしろ！」
その声を聞いてだ。ベイオウルフは。
その手に剣を持った。その剣を見てだ。
周りの兵達はだ。驚いて言うのだった。
「何ですか。その剣は」
「随分大きいですけれど」
「俺達程の大きさですけれど」
見ればその剣は異様な大きさだった。兵達程の大きさでベイオウルフが持ってもだ。全く遜色ないまでのものだった。その剣を持ってだ。
彼は叫び声の方に向かう。その動きは。
とてつもなく重いことがわかる剣でもだ。彼は平然と持って行くのだった。
「大丈夫だ」
「大丈夫って」
「そんな重い剣を持ってですか」
「戦えるんですか」
「俺ならいける」
その彼ならだというのだ。
「それにだ」
「それに？」
「それにっていいますと」
「この剣でないと駄目だ」
王宮の中を駆けながらだ。同行する兵達に話すのである。

「あいつ相手にはな」
「その巨人には」
「グレンデルには」
「巨人には大きな剣だ」
彼はまた言った。
「だからだ。これでいい」
「じゃあ。御願いしますね」
「とにかくあいつを倒さないとどうしようもないですから」
「そうだ。これ以上誰も死なせはしない」
ベイオウルフも言い切る。
「この剣で。奴を斬る」
これが彼の決意だった。その決意を以て。
声がした部屋に来た。そこにいたのは。
青緑の不気味な濡れた肌に苔の付いた緑の髪、そしてぬらぬらと濡れた禍々しい牙、赤く異様に光る目を持った巨人がいた。
腰巻だけを着けた巨人は丁度哀れな兵を一人頭から食っていた。頭は無残に砕かれ噛む度にあらゆるものが潰れ砕けていく音が聞こえる。

第三章

その巨人がだ。ベイオウルフを見て言うのだった。
「御前は誰だ」
「ベイオウルフという」
彼は巨大な剣を両手に持って構えながら名乗った。
「知らないな」
「人の名なぞ知らん」
こう返してだ。巨人は今度は腕を口の中に入れた。
そして骨ごと喰らいながらだ。彼にこう告げたのだった。
「餌の名なぞな」
「餌か」
「人は俺の餌だ」
そうだとだ。ぬらぬらと光る長い舌で言うのだった。
「所詮はな」
「ではその餌にだ」
「どうだというのだ？」
「貴様は倒されるのだ」
そうなるとだ。巨人に対して返す。
「今からな」
「俺が人間に倒されるか」
「何かおかしいか？」
「ははは、笑わせてくれる」
巨人は喰らっている骸を一旦置いてだ。
そのうえでだ。立ち上がった。するとその大きさは。
天井に着かんばかりだった。大柄なベイオウルフのさらに倍はある。その巨体を誇示しながらだ。彼に対してまた言ってきたのだった。
「人が俺を倒すか」

「では死ぬのだな」
「面白い。それではな」
「貴様を喰らってやろう」
こう言ってだ。巨人はベイオウルフに襲い掛かった。こうしてだ。
彼等は激しい闘いをはじめた。巨人は彼に相応しい巨大な槍を出してきた。
その槍でベウォウルフを上から刺し殺そうとする。ところが。
ベイオウルフはまずだ。その槍をだ。
巨大な剣で左から右に一閃してだ。真っ二つにしたのだった
それを見てだ。巨人は目を見開いて言った。
「何っ、槍を!?」
「これで終わりではないぞ!」
ベイオウルフは叫んだ。そのうえでだ。
剣を再び動かした。今度は右から左にだ。
横薙ぎにした。そうしてだった。
巨人の左腕を断ち切った。それで言うのだった。
「これでどうだ」
「ぐっ、俺の・・・・・・」
「まだ闘うのか?」
腕が床に落ち鈍い音を立てる。その音を聞きながら問うのだった。
「それならやるが」
「おのれ、人間が」
「見たところ傷は深い」
斬られたのは腕だけではなかった。そこから腹にまで至り斬られていた。腕の切り口からだけでなく腹の傷口からも鮮血を出しだ。
どう見てもこれ以上は闘えない。若しそれをすれば倒れるのは巨人の方だ。それは誰が見ても明らかなことであった。それでだ。
巨人はだ。忌々しげに言うのであった。
「覚えておれ」
「傷を癒してから来るか」

「その時を待っていろ」
「傷が癒えればな」
ここでこう言う彼だった。
「そうしろ」
「この恨み忘れん」
また言う巨人だった。
「貴様は必ず喰らう」
「できればな」
こう言ってだ。巨人の逃げるままに任せた。巨人はその時腕を置いていってしまった。その斬られた腕をだ。
それを見てだ。ベイオウルフは言った。
「あいつは死ぬ」
「死にますか」
「そうだというのですか」
「あの傷は助かるものではない」
だからだというのだ。

第四章

「間違いなくだ」
「ではこれで終わりですか」
「あの巨人が死ねばこれで」
「これで終わりですな」
「そうではないだろう」
しかしであった。ベイオウルフはこう言うのだった。
「おそらくまた来る」
「えっ、またですか」
「また来るというのですか」
「そうだ、来る」
あくまでだ。こう言うのである。
「間違いなくな」
「しかし。巨人は死ぬのですよね」
「助かるものではないと仰っているではありませんか」
「それでまたどうして」
「また来るというのですか？」
「巨人は一人か」
彼が今言うのはこのことだった。
「果たして一人か」
「あのグレンデルだけではないと」
「そう仰るのですか」
「そうだ。一人とは限らない。我等にも家族がいる様に」
そうした人手人と同じともだ。彼は言うのである。
「巨人にも家族がいる」
「だからですか」
「それでまた来るかも知れないと」
「巨人の家族がいれば」

「まだ用心が必要だ。そして」
ここでだ。また言う彼だった。
言いながら巨人が残していった腕を見てだ。こんなことを話した。
「これが使えるだろう」
「腕がですか」
「巨人の腕が」
「貴殿等は自分の兄弟の腕なり何なりが取られたらどうする」
その場合はどうするかというのだ。
「その場合はだ。どうする」
「それはやはり」
「その手をです。取り戻し」
「そのうえで共に葬ります」
そうするとだ。彼等も答える。
「兄弟が亡くなれば余計にです」
「そうせずにはいられません」
「そういうことだ。ならばだ」
またその腕を見てだ。話すベイオウルフだった。
「巨人の家族がいれば必ずここに来る」
「この宮殿にですか」
「また来ますか」
「そしてですね」
「腕を取り返しに来る」
「それを待つ」
ベイオウルフは今は腕を組んで言い切った。
「後は俺がやる」
「そのうえで巨人を倒す」
「ここで」
「さてな。それはどうか」
あえてだ。そこは言わないベイオウルフだった。
その代わりにだ。彼はこう兵達に話した。

「とりあえず今はだ」
「話は終わった」
「そういうことですね」
「そう、終わった」
終わったというのである。とりあえずグレンデルのことはだ。
そうしてだ。彼は話すのだった。
「ではだ」
「飲みますか、今は」
「とりあえずベイオウルフ殿が巨人を倒されましたし」
「それを祝い」
「祝い等はいいがあの巨人は間違いなく死んだ」
ベイオウルフは自分を祝ってもらいたくはないとしたうえでだ。
兵達に話す。

第五章

「そのことをだ」
「はい、祝って飲みましょう」
「王にもお話して」
こうしてだった。彼等は今は巨人が倒れたことを祝い深夜の宴に入るのだった。肉にビールをだ。好きなだけ飲んで楽しむのだった。
王もそれを祝った。しかしだ。
その中でベイオウルフもまた酒を飲んでいた。大柄な身体に相応しい巨大な木の杯に並々とビールを注いで。それを飲んでいる。
だが彼は酔うことなくこれからのことを見据えていた。そうしていたのだ。
その翌日はだ。彼は王宮に詰めていた。そのうえで夜を迎えた。
その彼にだ。また兵達が尋ねる。
「昨日のお話ですが」
「巨人の家族ですね」
「それが来るというのですね」
「いればな」
そうだとすればだというのだ。
「それは間違いなく来る」
「来ますか」
「やはりそうなのですか」
「巨人の家族が来る」
「いればですか」
「それを待つのだ」
腕を組みまんじりともせずだ。彼は言うのである。
「今はな」
「左様ですか。だからこそですか」
「気を引き締めておられるのですね」

「そうなのですね」
「いるとすれば今日来る」
しかもだ。今日だというのだ。
「家族のものは一刻も早く取り返したいからな」
「ではベイオウルフ殿、今は」
「ここにいてそうしてですね」
「相手を待つ」
「その巨人の家族を」
「そうする」
あくまでという口調でこう話してであった。
彼は待っていた。やはりその巨大な、巨人さえも斬れるその剣を持っている。そうしてその剣を見てだ。彼はまた言うのであった。
「この剣があれば」
「いけますか」
「今度もまた」
「そうだ。俺のかけがえのない友だ」
剣がだ。それだというのだ。
「これがあればだ」
「ベイオウルフ殿は勝てるのですね」
「その巨人の家族にも」
「そうだと」
「そうだ。勝つ」
勝てるのではなくだ。勝つというのだ。
「必ずな」
「はい、それではです」
「我等もせめてです」
「御供させて下さい」
「今こうして」
「わかった」
ベイオウルフもだ。彼等のその言葉に頷くのだった。

そのうえでだ。彼は待ち続けるのだった。
そして真夜中になった頃だ。まただった。
王宮の中に叫び声が木霊した。
「来た！」
「あいつだぞ！」
「死んだんじゃなかったのか！」
「いや、しかし来た！」
「間違いない！」
こうだ。別の兵達の声が木霊する。

第六章

「あいつだ！」
「グレンデルだ！」
「死んだんじゃなかったのか！」
「いや、あいつは死んだ」
それは間違いないとだ。ベイオウルフは言うのだった。
「それは間違いない」
「じゃあやっぱりですか」
「あいつの家族ですか」
「それが来たんですね」
「そうだ。それだ」
まさにそれだと応えるベイオウルフだった。
そしてそのうえでだ。彼は声がした方に向かった。
そこに行くとだ。グレンデルと同じ姿だが彼より一回り大きな巨人が暴れていた。その巨人に対してベイオウルフが言うのであった。
「腕を取り戻しに来たか」
「そうだよ」
返事はだ。女の声で為された。
「そうする為に来たんだよ」
「そうか。やはりな」
「息子は死んだよ」
そしてだ。女巨人はこう言ったのだった。
「傷があまりにも深くてね」
「そうだろうな。あの傷ではな」
そうなって当然だと。ベイオウルフも返す。
「そうならない筈がない」
「御前だね」
女巨人はその赤い目でベイオウルフに問うた。

「御前が息子を殺したんだね」
「その通りだ」
バイオウルフは女巨人を見上げて答えた。
「この剣でだ」
「息子の腕を斬ってそれで」
「全て俺がした」
「それならね」
どうするかとだ。女巨人は憎しみで燃える目で言ってだった。
その禍々しく伸びた爪と牙でだ。彼に襲い掛かるのだった。
彼は巨大な剣でだ。それに応えたのだった。
「行くぞ」
「むっ！？」
「貴様もまた倒す」
巨大な剣を構えて言うのである。両手に持ち。
「この俺がだ」
「仇を取らせてもらうよ」
「貴様の息子はここに夜な夜な来て人を食った」
「それが悪いっていうのかい」
「許せぬことだ。だからだ」
斬った。そうしたというのだ。
その話をしてだった。女巨人は爪を振り回す。それでベイオウルフを引き裂かんとする。
だが彼はそれを全て剣で受け止めて。それからだった。
女巨人の一瞬の隙を衝いてだ。一気にだった。
下から上にだ。剣を思い切り突き上げた。その一撃は。
女巨人の腹を貫いた。深々と突き刺さった。
それを受けてだ。女巨人は。
口からどす黒い血を吐き出しだ。忌々しげに言うのだった。
「やってくれたね」
「勝負ありだな」

「こんなところで」
死ぬつもりはないとだ。女巨人はまた言った。
「忌々しいがね」
「どうするつもりだ、それで」
「帰らせてもらうよ」
剣を握った。握ったそこから血が出るがそれに構わずだ。
それを己の腹から引き抜く。血が噴き出る。
その血をそのままにして。女巨人は逃れたのだった。
その彼女をだ。ベイオウルフは追おうとする。その彼にだ。

第七章

兵達がだ。口々に言うのだった。
「今度は追われるのですか」
「そうされるのですか」
「そうだ。追いそしてだ」
どうするかというのだ。
「完全に仕留める」
「だからですか」
「その為にも」
「行って来る」
「では我等も」
「御供します」
兵達もだ。同行を願い出るのだった。
「相手はまだいるかも知れません」
「そうして宜しいでしょうか」
「済まない」
こう言ってだ。ベイオウルフはその申し出を受け入れたのだった。
そしてそのうえでだ。彼等は女巨人を追うのだった。
白夜の道を深い傷を負っているとは思えない速さで進み。そしてだった。
辿り着いた場所は。そこは。
湖だった。女巨人はそこに入っていく。それを見てだ。
兵達はベイオウルフに尋ねた。
「ではこれからですか」
「この湖の中に入り」
「そのうえで」
「ここはだ」
どうするか。ベイオウルフは兵達に低い声で述べた。

「俺一人で行こう」
「えっ、ベイオウルフ殿お一人で、ですか」
「この湖の中にですか」
「入られますか」
「そしてあの女巨人をですか」
「そうだ。倒す」
まさにだ。そうするというのである。
「そうしてくる」
「左様ですか」
「そうされますか」
「そうだ。ではだ」
こう言ってであった。彼は剣を手にしたままだ。
湖の中に入りそうして潜りだ。それでだった。
彼は湖の中にある洞窟を見つけ。その中に入った。そこは。
水がなく空洞になっていた。そしてだ。
苔や藻があちこちにありじめじめとしていた。その青緑の中を進んでだ。
すぐにだ。あの巨人を見つけた。彼は左腕を失くしたまま事切れ横たわっていた。
そしてそのすぐ傍でだ。あの女巨人がだ。
仰向けに倒れだ。彼を見てきていた。そのうえでこう言ってきた。

第八章

「ここまで来たんだね」
「止めを刺しに来た」
そうだとだ。女巨人に告げる彼だった。
「その為にここに来た」
「あんた一人でかい？」
「見ればわかるな」
「確かにね」
それはその通りだとだ。女巨人も答える。
「あんた一人だね」
「最早動けぬか」
「やられて。ここまで戻るのに無理をしたからね」
その為だ。力尽きたというのだ。
「残念だよ」
「そうか。やはりな」
「しかし。よく来たものだよ」
女巨人は動かずにだ。声だけで言ってくる。
「人間一人で。ここまで来るなんてね」
「それがおかしいか」
「おかしくはないさ」
そうではないとだ。女巨人はまた言った。
「ただね。剣一本で来るなんてね」
「それがか」
「驚いたよ。凄い勇気だよ」
「褒めているのだな」
「そうだよ」
まさにその通りだとだ。女巨人も言う。
「それ以外の何に聞こえるんだい？」

「聞こえない」
それにしかだとだ。彼も返す。
「そうか。そう言うか」
「あんたはこれからもそうして生きていくんだね」
「剣を手にして戦うだけだ」
「わかったよ。じゃあそうして生きていきな」
女巨人は彼にまた言った。
「最後までね」
「俺は床で死ぬつもりはない」
それならば何処で死ぬか。答えは出ていた。
「戦って死ぬ。それだけだ」
「わかったよ。じゃあそうしなよ」
最後にこう言ってだった。女巨人はこと切れた。これがベイオウルフが名を挙げた闘いだった。
その彼はそれからも多くの魔物や敵を倒しその功で王になった。王になってからも彼は戦い続け。老齢になってもだった。
既に年老いていたが竜が出たと聞いてだ。玉座を立ちだ。
あの巨大な剣を手に竜の退治に向かおうとする。しかしだった。
ここでだ。騎士の一人が彼に言うのだった。
「王よ、もう闘いに出られるのは」
「駄目だというのか」
「御言葉ですが」
「確かにな。わしはもう歳だ」
老齢であった。大柄な身体も筋肉もまだ持っている。しかしその顔には深い皺が幾つも刻まれ髪の髭も白くなっている。老いは彼を確かに包み込んでいた。
彼のそれを見てだ。騎士も言うのである。
「ですから。我々に任せて下さい」
「いや、それでもだ」
それでもだとだ。ベイオウルフは言うのだった。

「わしは行く」
「行かれるのですか」
「それがわしの務めだからだ」
「王としてのですか」
「王であると共に」
それと共にだ。あるものは。
「剣を持つ者としてだ」
「それでなのですか」
「だからだ。わしは行く」
毅然としてだ。彼は騎士に言った。
「わかったな。ではだ」
「竜を退治にですね」
「今から行く」
こうしてだった。彼はその剣を手にだ。竜を退治に向かうのだった。
そいして騎士もだ。その彼に言うのであった・
「では」
「供に来るか」
「そうさせて下さい」
彼のその心を知っての言葉だった。
「是非共」
「わかった。それでは来るがいい」
「そうさせてもらいます」
こうしてだ。彼はベイオウルフと供に竜の退治に向かった。それがベイオウルフの看取りになるとしてもだ。彼は行くのだった。剣を手にし己の務めを果たす彼の為に。

剣を手に　　完

2011.7.5

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0289z/

剣を手に

2011年12月1日01時47分発行